

2 学校研究

(1) 研究主題及び副主題

自ら学ぶ子をめざして — 子供主体の算数科の授業を通して —

(2) 研究主題及び副主題設定の理由

子供たちが生きるこれからの社会は、加速度的に変化し、より複雑で予測困難な社会になると考えられる。このような変化の激しい時代を生き抜くために子供たちには、変化を前向きに受け止め、自らが主体となって様々な社会的変化を乗り越えていくことができる資質・能力が必要になってくる。そのためには、自ら課題を発見し、友だちと力を合わせて、主体的に解決に向かっていく力をつけていく必要がある。

これまで行われてきた「一斉講義型」の授業は、「与えられた課題を正確に解く」ことが重視された工業社会（Society3.0）においては有効であった。しかし、そうした学びだけではこれからの「予測困難な時代」を乗り切ることはできないと言われている。「Society5.0（超スマート社会）」を生き抜く力を子供たちに養っていくには、これまでの学校教育の在り方を根本的に変えていく必要がある。つまり、授業をつくる主語を変えるのだ。今までは「授業をつくる」というと、その主語は教師であることが多かった。教材を準備し、発問し、授業形態を整えていたのは、主に教師であった。これらのことをなるべく子供に委ね、子供を主語にした「子供主体の授業」を実現していくことが「予測困難な時代」を乗り切るためには必要不可欠であると考え、研究主題及び副主題を「自ら学ぶ子をめざして—子供主体の算数科の授業を通して—」と設定した。

(3) 研究の重点

重点 数学的な見方・考え方を働かせるための工夫

新学習指導要領の算数科の目標には、「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次の通りに育成することを目指す」と示されている。つまり、数学的に考える資質・能力の三つの柱を育むためには、数学的な見方・考え方を働かせながら、毎時間の算数授業を積み重ねていくことが求められている。

数学的な見方とは、事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に着目してその特徴や本質を捉えること、つまり「物事を捉える視点」のことである。数学的な考え方とは、目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、根拠を基に筋道を立てて考え、問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能等を関連付けながら、統合的・発展的に考えること、つまり「思考の進め方や方向性」のことである。数学的な見方・考え方は、子供の「問い」を基軸に展開される数学的活動のサイクルにおいて、問題を見出したり解決したりするときに積極的に働かせていくものである。

そこで今年度は、重点を「数学的な見方・考え方を働かせるための工夫」と設定し、事前に単元や領域、他の学年の「数学的な見方・考え方」を把握し、授業の中でそれらを働かせるためにはどのような手立てが必要なのか、研究を深めていきたいと考えている。

(4) 研究の進め方

- ・ 共通実践を具体的で焦点化された取組にすることで、資質・能力の育成を目指す。
- ・ 日々の授業で共通実践に取り組む。また、研究授業では重点について検証する。
- ・ 毎月ふり返しを行うことで PDCA サイクルを回し、研究の方向性や共通実践の取組に生かしていく。
- ・ 本校のめざす児童像に対して、国・県・町の学力調査や校内学力調査の結果や学習アンケート結果をもとに、児童の実態を把握し、授業改善の方向性を共通理解する。